室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

札幌市民のヒグマ意識：2012年から2014年への変化と不変

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 「野生生物と社会」学会 公開日: 2016-02-05 キーワード (Ja): ヒグマ, 札幌, 住民意識 キーワード (En): 作成者: 亀田, 正人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3855

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

札幌市民のヒグマ意識 ： 2012年から2014年への変化と不変

その他（別言語等）のタイトル	Residents’ Attitudes toward Brown Bears in Sapporo, 2012 - 2014
著者	亀田　正人
雑誌名	「野?生?生?物?と?社?会」?学?会?大?会?プ?ロ?グ?ラ?ム?・?講?演?要?旨?集?
巻	21
ページ	176-176
発行年	2015-11-21
URL	http://hdl.handle.net/10258/3855

札幌市民のヒグマ意識：2012 年から 2014 年への変化と不変

Residents' Attitudes toward Brown Bears in Sapporo, 2012-2014

亀田正人*
KAMEDA, Masato

キーワード：ヒグマ、札幌、住民意識

1　目的

ヒグマ予防対策構築の基礎とされるべき住民の意識と行動に関する基本的情報を提供する。

2　方法

近年ヒグマの出没が多発している札幌市を調査地として、アンケート調査を 2012 年と 2014 年の 2 回実施した。2012 年の調査は、札幌市全域からヒグマ出没に関して属性の異なる 4 つの地域（2011 年に初めて出没した市街、以前から出没していた市街、以前から出没していた郊外、および出没しない市街）を選び、それぞれの地域に住む住民の中から無作為に抽出した計 1,443 人に質問票を郵送し、郵送で回収した。2014 年調査は 2012 年に回答を寄せた 859 人全員を対象に、質問票を郵送し郵送で回収した。回収率は 2012 年調査が 60%、2014 年調査が 55%であった。

3　結果

(1) ヒグマの生息への態度　「人の住んでいない所にヒグマがいることについて」意見をきいたところ、2012 年調査でも 2014 年調査でも地域間に有意な差は見られなかった。ヒグマの出没する地域でも出没しない地域でも、ヒグマの生息に肯定的な意見が否定的な意見を上回る傾向が見られた。2012 年調査で 16 ないし 28%、2014 年調査で 23 ないし 26%の人が「絶滅すべき」または「いない方がよい」と答えたのに対し、2012 年調査で 47 ないし 54%、2014 年調査で 31 ないし 53%の人が「いるべき」または「いた方がよい」と答えた。

変化に着目すると、ヒグマの出没する地域では 2012 年調査と 2014 年調査の間に変化が見られなかったのに対し、出没しない地域では態度が若干厳しくなった。ただし、出没地域との間に有意な差が生じるほどの厳しさにはなっていない。

(2) ヒグマ出没時の行動　出没地域で出没を認知した人に限定して「何か備えをしましたか」と問うた。どの地域でも半数内外の人が何らかの備えをしたと答え、どの地域でも変化は見られなかった。概して備えをする人は備えをし、しない人はしないことが習慣化しているとみられる。

(3) ヒグマ対策の選好　住民は平常時、行政にどのような対策を望んでいるか。7 つの（一部仮想の）対策例を挙げて意見を聞いた。2012 年調査ではどの地域でも「ごみ指導」、「生息調査」、「住民教育」への支持率が高く、「予防援助」、「被害補償」、「森林豊富化」がそれに次ぎ、「春山捕獲」が最も低かった。ただし「予防援助」、「被害補償」、「春山捕獲」の支持率については、農地や果樹園のある地域が他の地域よりも高かった。農業被害対策を求める地域特性によるものと推測される。

2014 年調査では各地域に生じた変化の結果、地域間の違いはなくなった。どの地域でも対策への期待が高まっている。それも、住民への指導や教育、調査といった基礎的な対策と並んで、被害の予防、補償、予防的捕獲といった、より被害を意識した対策が求められるようになっている。

【謝辞】本研究は JSPS 科研費 22510038 の助成を受けたものである。

＊正会員　室蘭工業大学 全学共通教育センター